

## 十年後のラジオ界

海野十三

「ときにAさん。」

「なんだいBさん。」

「十年経ったら、ラジオ界はどうなる？」

「しれたことサ。ラジオ界なんてえものは、無くなるにきまつてる。」

「へえ、なくなるかい。今は随分流行ってるようだがネ。

無くなるとは、ヤレ可哀相に……。」

「お前は気が早い。くやみを言うつにや、当たらないよ。僕はラジオ界がなくなると言ったが、『ラジオまでが無くなる』とは、言いやしない。」

「ややっこしいネ、Aさん。そんなことが有り得るものかい。」

「勿論サ、Bさん。人間の生活に於ける水や火のように、これからの世の中は、ラジオがすべての方面の生活手段に、必需的なものとなってゆくのだ。『ラジオ界』などという小さい城壁にたてこもることが許されなくなる。一にもラジオ、二にもラジオで、結局、世界はラジオ漬けになるであらうよ。」

「ラジオ漬け には、今から謝っとくよ。この懐しい世界が、あの化物のように正体の判らないラジオなんぞにつかかってしまつと聞いているのが苦しい。僕はそんなことに

なる前に、自殺する方が、まだだ。」

「君には気の毒だがネBさん。自殺をしたって、ラジオは自殺者を追い駆ける。なにしろこの世と、死後のあの世とが、ラジオで連絡されるのだからネ。たとえば此処にC子というト

テシャンがあったとする。彼女は或る甚だ面目ないことを仕でかし、面目なさにシオらしく、ドボーンと投身自殺を果したとする。やがていよいよ死の国で、わがC子は正気づく。すると憩う違もなく、忽ち娑婆から各新聞社が自殺原因をラジオで問い合わせて来る。親たちや、友人や、恋人もラジオで訊ねて来る。受持区域の交番からオマワリさんが調べに来る。冥土に於けるC子の姿は無線遠視に撮られて、直ちに中央放送局へ中継される。娑婆ではこれを、警察庁公示事項のニュースとしてC子の姿を放送する。それは、一ツには冥土への安着を報せ、二ツには娑婆に債権者でもあれば今の内に申し出て、何とか解決方法をとらせるためである……。」

「一寸待ったAさん。君の話は面白いが、何だか落語か法螺大王の話を書いているような気がする。Aさん、怒っちゃいけないよ。君は本当に正気で言ってるのかい。」

「度し難いBさん。これは皆、専門の学術から割り出したもので、根拠のないことなど、僕は喋らない。唯、くだけて話すから、落語のように聴こえるのだ。」

「じゃ不審の点を質問するがネ。何故この世とあの世とがラジオで連絡ができるのだい。」

「早い話が『人間は死すとも靈魂は不滅である』という。こ

れが今から十年経たないうちに物理的に証明されるのだ。靈魂はラジオ、即ち電波を放射する。靈魂がラジオを出すんじゃないか、とは今日でもある一部の学者が考えている。しかし電波ならば其の一番大切な性質であるところの波長が何メートルだか判っていないのだ。これが今から十年以内に発見される。電波長が判ればあとはラジオとして物理的に取り扱えるようになる。」

「フーン、そんなものかな。それから、冥土に居る子どもの姿が何故娑婆から見えるのだい。」

「それは無線遠視テレウイジョン つまり、『眼で見るラジオ』というのが完成して実用されるからだ。無線遠視は冥土に於いては夙にこと発達している。地獄の絵を見ると、お閻魔さまの前に大きな鏡がある。赤鬼青鬼にひたたてられて亡者がこの鏡の前に立つと、亡者生前の罪悪が一遍の映画となって映り出す。この大魔鏡タイムマシンこそは航時機を併用して居る無線遠視器である。」

「警すぜAさん。じゃ矢張りお閻魔さまの前に並んでいる『見る眼』や『嗅ぐ鼻』も、ラジオ的に理屈のあるものなのかい。」

「勿論さBさん。『嗅ぐ鼻』は無線方向探知器の発達したものの、『見る眼』は光電受信機フォトエレクトリック・レーダーの発達したるものなのサ。これ等も十年後には、君の前へ正体を明らかにするだろう。」

「じゃ、うっかり死ぬわけには行かないネ。無銭飲食をした揚句、自殺と出掛けても娑婆から借金取りが無線で押し寄せるなぞ、洒落にもならない。この世の悪事は、すべて自らが償わねばならなくなるわけだネ」

「だから、この世で悪事をするものが絶えてしまつ。ラジオのお蔭で、この世ながらの神の国、仏の国となる。有難いじゃないか。」

「そりゃいいが、この世からあの世へ伸すことができるというからには、あの世の亡者連中もこの世へ、のさばってくることになりゃしないかい。」

「それは大有りさ。幽霊なんかゾロゾロ現れるだろうな。そりやどうも仕方がないサ。君を思いつめ、君の奥さんを呪って死んだD子の亡霊なんぞ、早速ドロドロとやってくるぜ。」

「ウワァッ。僕は明日から、参禅生活を始める決心をした！」

(一)「とてもシャン」の意。「シャン」はドイツ語の“schön”から来た言葉で当時の学生用語で「美人」のこと。

PDF化にあたって

本PDFは、

『海野十三全集』別巻2「日記・書簡・雑纂」(三一書房)を元に作成したものである。

PDF化にあたって、

「トテシヤン」の注は、PDF化に当たってつけた。

テキストには青空文庫を使用した。

振り仮名は、青空文庫版に付いているものを取捨選択したほか、新たに付け加えたものもある。

ラジオ関係の古典的な書籍及び雑誌のいくつかを

ラジオ温故知新(<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/index.html>)

↓

ラジオの回路図を

ラジオ回路図博物館 (<http://fomalhaut.web.infoseek.co.jp/radio/radio-circuit.html>)

に収録してある。参考にしてください。